

小倉生健会が総会を開催しました

小倉生健会は第14回総会を開きました。会長あいさつでは、「小倉南区に班をつくるために学習会を開いて会員も増えたこと」「小倉には、全生連を脱退した小倉生健会と、我々の全生連小倉生健会の二つの生健会がある」ことなどの話がありました。

来賓の方も4人参加していただき、二度に分けて挨拶して頂くなどうれしい総会でした。

参加者からは、「以前、電動車椅子をケアマネが申請してくれたが、保護課のケアマネから断られていた。生健会から、『同様の問題で、保護課に改善を申し入れている。再度、申



来賓の皆さんから激励をいただきました

請して断られたら連絡を下さい。断られたら生健会が抗議するから』と言われていたが、今度はすんなり認めてくれた」などの発言もあり、終始和やかな雰囲気のもとで閉会しました。



「精神障がい者」にも「居宅介護」サービス利用が

生活保護の実態をリアルに描いた安田夏菜著の小説「むこう岸」（裏面に記事）のテレビドラマが放映され、その中で、心を患った主人公の母親に、「ホームヘルプ（居宅介護）サービス」を利用する話があり、知らなかった制度に「えっ！」と驚きました。

調べてみると、身体障がい者だけでなく、精神障がい者に対しても、介護保険制度のような「居宅介護」制度があり、買い物・調理・洗濯・掃除や、通院援助なども利用できます。生健会に相談を寄せる方のなかには、心を患っている方が多くいます。

利用するためには、まず、各区の「高齢者・障害者相談コーナ」で相談して下さい。

申請・審査を経て“障害支援区分”が決まれば、介護保険のように利用計画に基づき利用ができるようになります。

生活保護利用者や住民税非課税世帯の利用料は無料です。

「生活保護費を元に戻せ」福岡「高裁結審」



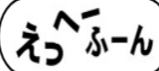
結審の前に、高裁前で宣伝する原告や支援者の皆さん

小倉生健会



生活と健康を守る

一人はみんなのために、みんなは一人のために



トヨタ自動車の「利益配分」に驚いた

モヤモヤしていたことがよく分かり“スッキリ”しました。トヨタ自動車の利益配分のことです。

トヨタ自動車の2024年3月期決算の営業利益は5.4兆円で、前期にくらべ2.6兆円も増やしました。しかし、労働者の賃金総額は46.1億円で利益のわずか0.09%ですから、1000分の1でしかありません。しかも、アベノミクス以降、440億円も賃上げ「減税」を受けていました。

ところが、株主への配当総額は1兆円を超え、なんと賃金総額の200倍以上で、とんでもない逆行ぶりです。

それなのに5月には、1兆円の自社株買いと2兆円規模の自社株消却を発表しました。

どちらも配当金の増額と株価つり上げのための代表的手法で、更なる配当と株価の引き上げを狙っており貪欲過ぎます。

利益優先の中で、車の安全を担保するための検査費用を削る重大な不正が繰り返され、労働者や下請け企業を搾取して生み出した利益を、株主に惜しげもなく差し出しています。

トヨタの会長である豊田章男氏の役員報酬は、前年比6割増の16.2億円。つまり60%の賃上げです。豊田会長は大株主でもあるので、配当も17.6億円あります。あわせて33.8億円を1年間で受け取っています。

一方、国民の方は、実質賃金が、1996年をピークに年74万円も減っています。

2度にわたる消費税率の引き上げで17.3兆円、人口で割れば、国民1人あたり13万9000円も消費税負担が増えてしまいました。

かつてない生活苦は、まさにアベノミクス以来12年の自民党・公明党の政治の結果です。

大企業の純利益はアベノミクスからの10年間で3倍。内部留保は178兆円増えて511兆円。日本の大資産家、上位40人の資産は12年間で29.5兆円へと3.8倍にも膨れ上がりました。

裏面の記事にあるように、元大統領経験者ら19人が、G20の参加国に「超富裕層に課税を」との要請を発表しました。これこそ本道です。

「エアコン購入・設置費用」半歩前進

エアコン設置については、先月号で市議会陳情の記事を掲載しましたが厳しい対応が続いています。

しかし、少しでも改善されたことが、厚労省の市保健福祉局長宛の「事務連絡」で明らかになりました。

内容は、エアコンが設置された借家から、エアコンがない借家に引っ越した場合は、エアコンの購入・設置費用を認めることになりました。全国での運動の成果です。



「大相撲」の審判は近代的

オリンピックでの好プレーが展開されているが、筆者が若いころボクシングなどの国際試合では、それぞれの国の審判が自国の選手に高い点数をつけることが当たり前だった。スポーツマン精神などは全く感じなかった。

そんな中、長い歴史を誇る「大相撲」の審判が一番、近代的で民主的だと思う。まず、切腹覚悟の行司が勝敗を下す。それに異議があれば「検査役」と呼ばれる勝負審判5人が「協議」をして決める。しかも、最近はビデオを重視していることに感心する。

一点だけ気になるのは、「ほぼ同時」をビデオで詳細に判断し、白黒をつけることだ。

「ほぼ同時」であれば、“取り直し”にすべきと思うのは筆者だけだろうか。



B29が日本本土に初めて襲来した地は北九州市だった

西日本新聞「戦後80年へ」より

1944年6月16日未明、攻撃目標は鉄鋼生産の要だった八幡製鉄所のコークス炉でした。投下管制の効果もあって約370発の爆弾は目標を外れ、北九州全域に落ちた。

犠牲者は322人に上ったが、その数は紙面に掲載されなかった。

日本側はB29を1機撃墜したが、新聞には「10機撃墜」とある。大本営は「B29 およびB24 二十機内外北九州地方に来襲せり、我が制空部隊は直ちに邀撃(ようげき)し、その数機を撃墜、これを撃退せり、我が方の損害極めて軽微」と発表した。

「何のこれしき! 闘魂の生産陣に凱歌」の大見出しも。

知らなかった地元の歴史を伝える西日本新聞に感謝。

小説「むこう岸」の NHK テレビドラマ

小説「むこう岸」を購入して読みました(表面の関連)。

「日本児童文学者協会賞」や「貧困ジャーナリズム大賞特別賞」を受賞した安田夏菜さんの同名の原作をNHKがドラマ化し、それを録画にとって何度も見ました。NHKもこんな作品をもっと増やせばいいのと思います。

母親が精神的な病気で寝たきりの母子家庭の中学生の女の子。中学生の女の子は幼い妹と三人で生活保護を利用して暮らしています。家事と幼い妹の面倒を中学生が担うヤングケアラーです。

娘は中学校で「生活保護はいいよなー。働かなくても税金で暮らしているのだから」と、いじめられます。

もう一人は、親から強制されて入学した有名私立中学校を逃げ出して、女の子の中学校に転校してきた男の子です。男の子は、女の子を応援するために生活保護や障がい者支援の勉強をします。

ドラマの中で、男の子が「僕はあの一文(法第二条)を美しいと思う。その美しくも難しいものを必要な人に、かみ砕いて分かりやすく伝えることができたら。今を生きる人に、自分が勉強したことや知識を広げて行けるなら」と叫びます。

その生活保護法第二条(無差別平等)は、「すべて国民は、この法律の定める要件を満たす限り、この法律による保護を、無差別平等に受けることができる」という内容です。

以下は、ビデオを見ながら必死で記録した「せりふ」の一部です。

「助けが必要なときは助けが必要なのに」「嘆いても責めても人は変わらない。もし変わるとしたら誰かと関わりを持った時だけ、それができなくて泥沼にはまる人をいっぱい見てきた」

「看護師になることは立派な目標だと思う。それはあなたのためだけでなく、社会のためにもなるんだよ」

「あなたのためだけでなく、社会のため」

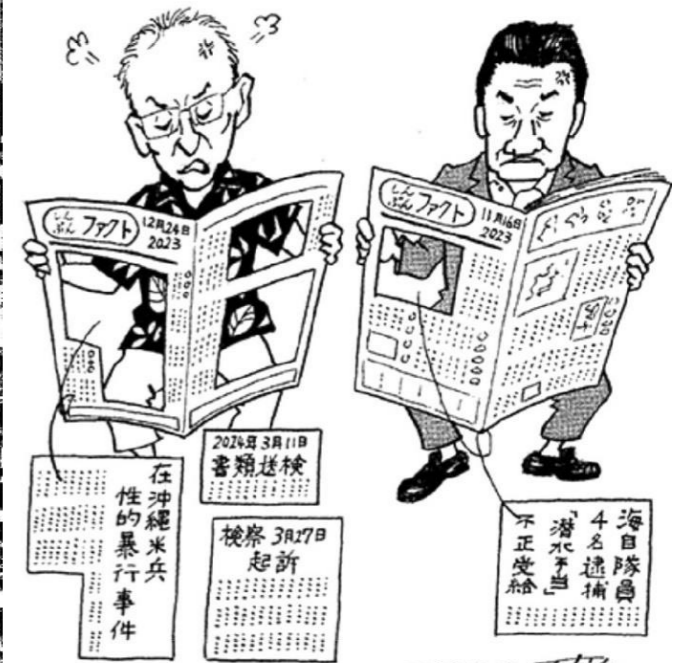
「あなたが将来生活保護を受け続けるのと、勉強して社会に貢献できるのとどっちがプラスになると思う。だから、胸を張って使えるものは使って、あなたは施しを受けているわけじゃない。社会から投資されているんだよ」

「使えるものは、何でも使ってやる」

「お前みたいなのやつが、この世にいてくれなきゃ困るんだ」



「むこう岸」の原作本を貸し出せます。声をかけて下さい。



組織にまん延する「隠蔽(いんぺい)」体質 西田としこ

超富裕層に課税を

G20参加国に要請

世界の大統領・首相経験者ら19人がこのほど、20カ国・地域(G20)参加国に超富裕層への課税を目指すG20議長国ブラジルの提案への賛同を呼び掛ける共同書簡を発表しました。

書簡は「各国政府が協力できないことが、超富裕層による税の回避を可能にしている」として、

元大統領ら19人 共同書簡を発表

「19人は、民主主義の強化を目指す元首脳らからなる国際フォーラム「クラブ・デ・マドリッド」(70カ国超から100人以上が参加)に所属。チリのバチェレ元大統領、スペインのサパテロ元首相、フランスのドビルパン元首相な

どが名を連ねています。10日付の共同書簡は、世界のビリオネア(10億ドル(約1600億円)以上の資産保有層)の税率が保有資産のわずか0.5%以下にとどまっておき、「教育や医療、インフラなどに有効に使われるべき資金が、超富裕層によって非生産的に蓄積されている」と指摘しています。超富裕層への課税を実現する重要性を強調し、これが実現すれば「多国間主義を活気づけ、共通の利益のために各国政府が協力できることを示すことになる」と述べています。書簡とともに声明を発表したバチェレ氏は、「最も富む者たちが全ての国で課税され、彼らの利益のためのルールづくりをさせない世界が必要だ」と訴えました。

「しんぶん赤旗」より

「しんぶん赤旗」より